

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

和 久 希

【所属】(助成決定時)

筑波大学大学院 人文社会科学研究科

【研究題目】

理と文

——中国六朝期における儒仏道三教融和説の実相と言語思想——

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、中国六朝（魏晋南北朝）期における儒仏道三教融和説の実相を、当時の言語思想に着目し、とくに「理」と「文」との検討を通じて究明しようとするものである。六朝期は国家的揺動が長く続いた動乱期であり、一般には国家思想である儒教の後退と道教、仏教の台頭にともなう「三教交渉」の時代とみられている。しかし本研究では、儒教が退潮傾向に陥ったために他思想が前景化したとするのではなく、六朝期の儒教が道仏あるいは老荘、文学といった文化的諸価値を融和的に含み込みながら、それらの複合体として展開したとする思想史的仮説に立脚する。儒教は「天」を中心に据えるものであり、漢代には「天」の法則的秩序すなわち「天理」解明のための数理科学的営為がさまざまになされていた。その後、六朝期になると「天理」に対応する「人文」とくに「人」における合理的秩序（文）としての「言語」への関心が隆盛した。そしてそれは、単に儒教経学（経典解釈学）にとどまるものではなかった。そこで本研究は、当時の言語思想の探究により、儒教を基層とする文化的諸価値の内実の解明を目指すことにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、文献学的実証を方法とする。とくに諸注釈、引用文献の渉獵をもとに物的証拠を着実に積み上げることで、本研究が提示する思想史像を堅牢確実なものとする。

本研究期間中、報告者は以下の四件の個別的对象に関する研究に従事し、各々を主題とする学術論文を執筆した（二篇は既刊、残る二篇は2013年度中に刊行予定）。

第一は、三国魏文帝・曹丕による文章経国論である。文章経国論は、近代的文学精神が古典古代に存在していたことを示すものではない。しかしまた、特定の思想的著述のみに限定して把握すべきものでもない。本研究では、文章経国論が儒教経典を根底に、あらゆるすぐれた文章を含みこみながら世界像の全体を提示しようとするものであり、皇帝自身による『典論』『皇覧』制作のための理論的根拠であることを検証した。

第二は、竹林七賢の一人、阮籍による老荘易三玄解釈である。阮籍は三玄すべてに関する「論」を著すことにより形而上的至高への理知的な把握を試みたが、彼の思弁的構想は、実在的世界とその背後にある理念的基盤までにとどまるものであった。本研究では阮籍の論理的追求の途絶に着目し、それが彼の内的な直接経験の純粋性・絶対性を保全するものであることを討究した。

第三は、東晋の沙門、支遁の玄言詩、『莊子』解釈と般若思想解釈である。支遁による形而上学的思索は、『莊子』に依拠しつつ、万物の基底実在のさらなる深奥を目指すものであったが、彼はそれを単に中国古

典思想の伝統にとどまらず、外来思想である仏教的理念とも接合するものであるとみていた。本研究では支遁の般若思想解釈を分析し、彼が般若思想を媒介として魏晋玄学の形而上学的思惟にさらなる展開をもたらしたことを立証した。

第四は、齊梁期の文章論『文心雕龍』である。本研究では「經典の枝條」という語に着目し、劉勰があらゆる文章を経典的価値のもとに集束させ、国家秩序の確立のための資源とみていたことを論証した。また劉勰は、經典が文彩をとまうのと同様、文章における整合的秩序を重視していた。本研究ではかかる正統的文彩の確立が五行説にもとづくことにも論及した。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究期間中、報告者は六朝思想史の中でも、言語思想、とくに三国魏の皇帝権力と「文（文章）」、魏晋交替期の形而上学的至高と論理的追求、東晋期における伝統思想と外来思想、齊梁期の文章論と国家規範を取り上げ、その深底に潜在する儒教的エートスを探究してきた。本研究の個別的对象はいずれも当時の文化的画期をなすものであり、本研究の遂行は、複雑に交錯する六朝思想史のダイナミズムを一貫したものとして提示するものである。そしてそれは、当時の正統思想である儒教思想を核心に据えるものであった。ここにおいて、六朝期の儒教がさまざまな文化価値を融和的に含み込みつつ、その根幹に位置していたことが文献に即して明らかとなったが、これは現在の「三教交渉」を主流とする六朝思想史観に対して新たな視座を提供し、思想史像を再構築するための契機となるものである。